

ドイツ労働者評議会運動の起源 (下)

The Origins of The Movement for

Workers Councils in Germany

1918-1935

“Raden” by with a forward by Joe

Thomas Coptic Press

片山政幸訳

工場組織の機能

ではそれは、単なる工場組織の弱小党への転落という党員の枯竭だけのことであつたらうか。事実は決してそれに留まるものではなく、それは組織の機能の変化でもあつた。工場組織は一度もストライキの指導、雇庸者との交渉、要求のまとめ（これらはストライキ参加者自身の仕事であつたが）の仕事を引き受けることを公言したことはなかつたが、それら工場組織はまぎれもなく闘争のための一機関であつた。彼らはストライキにおける自己の役割を宣伝煽動と支援に限定していた。ストライキののろしが上ると、いつでも工場組織はストライキ推進の支援をした。彼らの出版物は即ストライキのための出版物でもあつた。彼らは労働者総同盟と同じくその統一派からストライキのための演説者を出し、ストライキのための会議を組織した。しかし、交渉をいかに進めるかと言うことに関する限りそれはストライキ委員会の任務であり、その点に関してストライキ参加者と同格の代表を工場組織からストライキ委員会に出すことはしなかつた。

共産主義労働者党は、政治的党として異つた機能をもつていたといえる。その任務は政治・経済情勢の分析と宣伝煽動を総括するものであると考えられていた。選挙のときには反議会主義活動を展開し、それは工場で、街頭で、失業者等の間で行動委員会と呼ばれていた。

一九二一年の血の弾圧の後、経済的繁栄の時期にはかつてそのように機能づけられていた共産主義労働者党の活動も次第に理論的活動へと限定されていった。工場組織の活動も単なる宣伝煽動と分析、いわゆる政治活動になつてしまつた。多くの人々が消耗

して運動から遠ざかり、その結果、工場はもはや組織の基盤なり得ないと考えるに到ったのである。会合は工場の外で開かれるようになった。地域を基盤として、おそらくヘルマン流のバーなどに集まり、古い労働歌をうたい、希望や怒りを語り合ったのであろう……。

もはや共産主義労働者党、労働者総同盟、労働者総同盟統一派の間には実践的な相違はなくなつたといえる。実践的にはほぼ同じような路線を歩み、彼らがみずからを何と名づけようがすべてそれらは普通の単なる政治集団にすぎなかつた。評議会共産主義のすぐれた理論家であるオランダのマルクス主義者パンネコックはこの点に関して次のように語っている。

労働者総同盟は共産主義労働者党のように、当面の目標は革命であることを標榜する組織である。革命の退潮期には誰もそのような組織を創立しようなどと考えることはできなかった。ともあれそれは革命の時期を生き、以前それを創立しその旗のもとに結集して闘った人々は、自己の闘いの経験を無にすることを望まなかつたので、みずからの闘争の経験を切り枝のように革命的発展のために塩づけにして保存することを願つた。

この種の同じような政治色の党はあまりにも沢山あつた。今日我々が知っているあのオチスによる労働者階級を脅かす危険がしのびより、それに対する古い労働者組織の惰性と憶病さが加わって統一への動きが起つた。一九三一年の十二月、労働者総同盟（すでに共産主義労働者党からは離れていた）は、統一派と融合した。わずかな部分が共産主義労働者党に残り、また幾人かが労働者総同盟統一派から出てアナキストの隊列、自由労働者同盟に参加し

た。しかし、工場組織の生き残り組はそのほとんどがこの新しい組織、ドイツ共産主義労働者同盟（KAUD）に加わつた。この組織はその名称の中で、労働者総同盟がかつてそうであつたように「総組織」ではないことを表明していた。それは革命的、意識的共産主義者であることを宣言する労働者を統合しはしたが、もはやすべての労働者を統一することを宣言することはできなかった。

ドイツ共産主義労働者同盟（KAUD）

名称が変わつたと同時にその思想にも変化が生じた。その時まで評議会主義は「組織された階級」の思想をいだいていたといえる。労働者総同盟もその統一派も、はじめから労働者階級を組織するのは彼らであり巨万の大衆は彼らの傘下に結果するであろうと考へていた。それは、革命的サンジカリズムの、すべての労働者が彼らの同盟に入るであろうと考へる考え方に似ていた。

しかしこのとき、共産主義労働者同盟は労働者に労働者自身の力で行動委員会を組織し、組織的連絡もみずから担うことを求めた。それはもはやあらかじめ闘争のために形成された組織に依拠する「組織された階級闘争」ではあり得なかつた。新しい概念では組織された階級は自身の指導下で闘う労働者階級であつた。

この概念の変化はその他の点にも影響を及ぼしていた。例えばプロレタリアートの独裁の理論である。もし「組織された闘争」が闘争の以前に形成された組織の唯一の課題ではもはやなくなつたとするならば、これらの組織はプロレタリアートの独裁の機関として考へることはできない。かくて意見の不一致の一つは消えた。共産主義労働者党または労働者総同盟のいずれかが権力を行使するに

しても、プロレタリアートの独裁は特殊の機関の手中にあることはできず、闘争している階級の手の中にあるというところは合致するところであった。新しい共産主義労働者同盟の任務は、共産主義の宣伝の元締めとして闘争の目的を分類し、労働者階級の尻をたたく、原則的には非公認のストライキで闘うことを呼びかけ、労働者階級の闘いのどこに強さがありどこに弱さがあるのかと示してやることにあった。

共産主義社会と工場組織

この思想の発達は共産主義社会に関する既認の思想の修正がもととなっていた。各政治集団に共通した一般的なイデオロギーの認めるところのものは国家資本主義であった。国家資本主義のいろいろな形態は考えられていたが要するに非常に簡単な原理に還元されるものであった。国有化による、計画経済による、社会改革による等々の国家であり、社会主義をテコとし、労働組合と国民議会の活動を闘争の手段とすることによって獲得するそのような国家であった。この理論によれば、労働者階級は何も苦勞して独立した階級として闘う必要はなく、労働者階級の闘争の指導や運営は議会と労働組合の指導者にまかせておけばよいのである。いうまでもなくこのイデオロギーでは、労働組合と党は国家の一構成部分となり、未来の社会主義もしくは共産主義社会の指導と運営は彼らの手になるものであった。

事実（ドイツ革命の敗北に引き続く）最初の頃、この伝統はただ労働者総同盟、その統一派、共産主義労働者党の革命概念に強くしみついていたのである。この三つは皆、「幾千万」の労働者をプロレタリアートの独裁表現のために集団化した組織がお気に

入りであった。例えば、一九二二年労働者総同盟は「ドイツの全工場の六パーセント」の活動的メンバーをもととして、手前勘定で政治権力を引き受ける情勢にあると宣言したのであった。

しかしこのような考え方は変更された。多数の工場組織があり、労働者総同盟とその統一派とによって統合され、統御されているときには決定に際して最大限の自主性が要求でき、新しい政党の結成をさけることができたのである。だがはたして共産主義社会においてもこの自主性が保持できるか否かが問題であった。経済生活は高度に専門化され、どの企業も直接的な相互依存関係にある。もし仮に、社会的富の生産と分配かときに中央集権的な形でなされないとするならば、経済生活はどのように運営されればよいのであろうか。国家は生産と組織の調整者として必要であらうか、それとも不必要なのであろうか。

共産主義社会に関する古い思想と新しく提起された社会形態の間に矛盾があることは容易に理解される。経済の中央集権化のおそれがある一方、中央集権化をいかに防御するかの手だては明らかではなかった。大小いろいろな形態での「連合主義」か「中央集権主義」かが論議された。労働者総同盟統一派はどちらかと言えば「連合主義」よりであり、共産主義労働者党は「中央集権主義」よりであった。一九二三年共産主義労働者党の理論家であるカール・シュレーダーは、「より中央集権化された共産主義社会ほどよりすぐれているであらう」と言明した。

事実、「組織された社会」の古い概念的基礎の上にとどまっている限りこの矛盾は解決できない。共産主義者のある部分は革命的サンジカリストの労働組合によって工場接收の思想の方に集ま

り、また他の部分はボルシェヴィキのように国家が生産と分配の過程を調整し、国民所得を労働者に分配するための機関であるとする思想をもっていた。

「連合主義か中央集権主義か」に基礎をおいて共産主義社会を論ずることは不毛である。これは組織の問題、技術の問題であり、共産主義社会の問題は基本的には経済の問題にある。資本主義は別の経済制度、生産手段と労働力の生産が「価値」の形態をとらず、特権階級の利潤のための労働者大衆に対する搾取のない経済制度に道をゆずらねばならない。

「連合主義か中央集権主義か」の論議はその組織の形態と経済的基礎がいかなるものであるかが明らかにされていなければ無意味である。社会組織の形態は任意に決定できるものではなく、すぐれて経済的原則から導き出されるものである。例えば、利潤と剰余価値の私的あるいは集团的占有の原則はあらゆる形の資本主義経済の基礎に横たわっている。これが共産主義経済を貨幣のない、市場のない、私的あるいは国家的な利潤のない、資本主義に對する否定的な経済制度であると説明するだけでは不充分であることの理由である。ただ否定に留まらず、その積極的な性格を示し、資本主義にとってかわっていく経済の法則は一体何であるのかを示す必要がある。これで「連合主義か中央集権主義か」の問題がもはや問題になり得ないことがお解りになったと思う。

ドイツにおける運動の終焉

一九二九年の暮、労働者総同盟は共産主義労働者党から分離した。当時、労働者総同盟の機関紙は臨機応変な戦術をとることを警告し、賃金引き上げの要求、労働条件の改善、労働時間の短縮

の闘争に限定して支持していた。もっと正確に言えば、共産主義労働者党はその戦術のなかに階級協調に向ってすべり込んでいくサギ的政策の誘惑を見たのであった。指導者アダム・シャーレルを、敵側とボス交渉したというかどで（ドイツ共産党出版部で発行された小説に書かれている）追放した後、共産主義労働者党は個人テロリズム支持へと転向した。この思想を受けて活動した一人にマリナス・フォン・デア・ルッペがいる。ナチス国会に火をつけ議事堂を焼くことで、彼はこの象徴的な宣伝行為によって労働者に政治的関心を呼びおこし、ナチスに反抗して立ちあがることを願ったのであった。

しかしどのような戦術をとってみても結局無駄であった。ドイツでは経済危機が大きな深みをもって進行していたのである。失業者は巨大な群をなし、非合法的ストライキは不可能だった。もはや労働組合の指示に従うものはいなかったが、労働組合は雇庸者と国家とに直接奉仕するものとなっていた。評議会共産主義の出版物は頻繁に没収された。最高に皮肉だったのは、当時としては唯一の大非合法ストライキ——一九三二ベルリン運輸労働者によるストライキ——がスターリン主義者とヒットラーの高僧とによって、社会民主主義労働組合の幹部を窮地に追い込むために組織されたことである。

ヒットラーが権力の座についてからすべての党派の戦士たちは狩り出され、多数の人々が消え去った、あの収容所に閉じ込められたのである。一九四五年、生存者のうち数名はロシアの軍隊がサクソニーに進駐したとき、ゲーペ・ペー・ウー（ロシアの秘密警察）の命令で処刑された。一九五二年頃になってからでさえ、西

ベルリンで白昼労働者総同盟の古い指導者の一人アルフレッド・ヴィランドは誘かいされ、東ドイツへつれてゆかれ重刑を言い渡されたのである。今日ではもはや評議会共産主義運動の形跡は残っていない。人も思想も一掃された。経済の拡張と繁栄は労働者の目をどこかよその方へ向けさせている。

(この論文はドウチュケなどに特徴づけられる新しい学生運動のなかにこのような思想が生きかえる少し前に書かれたものである。)

労働者権力の経済的基礎

共産主義経済の基礎に関して、ドイツ労働者総同盟は「組織された階級」の古い観念にとらわれてはいなかった。せいぜい労働者の要求の一片ぐらいしか代弁できない専門組織の助けをかりず、労働者は自力で全大衆を抱括した闘争によってのみ真の統一を勝ち取れると理解していた。一九三〇年(オランダの評議会共産主義者のグループによって)共産主義の生産と分配の基本問題に関する著作が出版された。

この著作は、いかにすれば「よりよい、公正な」社会を建設できるかというような類いの計画は提起していない。この論文では、ただ総体的組織としての共産主義経済組織の問題、階級闘争の実践の問題、社会行政の問題等に関して論じられている。この著作『原理』は主体的な政治次元の大衆運動による闘争の経済に及ぼす影響の理論的裏づけを試みている。労働者評議会が権力を掌握した時に、「みずからの闘いを直接管理する」ことを学んだプロレタリアートは、労働時間の測定が全生産および分配の要となる

という新しい経済法則を導入することによって自分たちの権力を基礎づけることができ、労働者はただこの各生産分野において労働時間を測定し、生産を分担する方法によってのみ自分たちの力で生産を推進することができることを述べている。

『原理』はこの問題を、被搾取者の、単に私有財産制の廃止にとどまらず、搾取の全面的廃止を目指す視点から吟味している。我々の時代の歴史は、既に私有財産制の廃止が搾取の終焉の必要条件ではないことを我々に教えている。

アナキストの運動はこの事実をマルクス主義者よりずっと以前に理解していたし、アナキストの理論家はそのことに慎重な注意を払っていた。後になってからの分析では、評議会共産主義者も同じ結論に到達している。しかし、マルクス主義者(社会民主主義者、ボルシェヴィキ)が独占資本段階に到達している資本主義機構の土台を何ら変えることなく、資本主義をいわゆる労働者国家の支配下に置こうとしたのに対し、アナキストはいかなる形態の国家をも否定し、自由なコミュニティの連合を主張した。

アナキストの有名な理論家のひとりセバスチャン・フォールは『私の共産主義』(一九二一年・パリ)で、コミュニティのメンバーは需要と生産能力の調査をした上で「各々任意に決められた地域の消費者の需要の総量と生産人口に従って……国民委員会が設置され、各地域委員会へその地域が自由にできる生産物の量を知らせ、またどの位の生産物が支給される必要があるかを知らせる。この国民委員会の指示に従って各地域委員会は同じように各コミュニティ委員会へそのコミュニティが自由にできる生産物の量と支給されるべき生産物の量を知らせるべく同様の仕事を果たす。最後

にコミューン委員会は各労働者に対して同じことをする」と、述べている。

セバスチャン・フォールは、はやくからその土台に基本的なそして生き生きとした自由合意の原理がなければならぬことを主張している。経済体制は高尚な声明よりも経済の原理を要請していたのである。また、次に引用する有名な社会民主主義の理論家ヒルファードィングの言葉をひいてみよう。そこには経済原理が欠けているという人がいるかも知れないが――

「社会主義社会のコミューン、地域、国家の各委員は、いかにして、どこでどの位、どんな方法で新しい製品が自然もしくは人為的な生産条件から得られるかを決定する。生産と社会需要の総体を網羅する消費統計の助けをかりて、この統計に示される需要に従って経済生活を調整する。」

(ヒルファードィング『金融資本論』)

この二つの論文の基本的な相違はそれほど顕著ではない。しかし、アナキストには基本スローガン「賃金制度の廃止」のもとに運動を進めてきた功績がある。だが、この社会の未来図においては、マルクス主義者が人民政府と考える国民委員会や「統計局」等は、いうなれば貨幣流通なしの経済、「自然経済」を実践するものとして支持される。住宅、食糧、電気、交通機関――すべてこれ等は無料となる。特定の商品とサービス部門にのみ貨幣通用を認める。(普通、人口と消費高の相関に従って決められる)

外観は立派だが、この方法での賃金制度の禁止は搾取の廃止をも、社会解放をも意味しないのである。経済の「自然」の領域が拡大す

ばするほど、労働者は分配機関を通じての彼等の所得の安定を求めようになる。

自然な交換が行われ、住宅、電燈に関する限りすべて無料の無貨幣経済の例がひとつあった。――ロシアの「戦時共産主義」の時代にあらわれたのがそれである。このことはそのような無貨幣制度は永続性がなく、階級支配にもとづく政治体制とも共存し得ることを示している。

現実是我々に、第一は搾取の廃止を伴わない私的所有の廃止が可能であり、第二に搾取の廃止を伴わない賃金制度の廃止が可能であることを教えている。

だとすれば、プロレタリア革命の問題は次のような形で提起される。

1. 搾取の廃止を可能にする経済条件は何か。
2. 労働者が勝ち取った権力を維持することを可能ならしめる経済条件は何か。

『原理』は共産主義の経済的基礎の研究であるが、出発点は経済学的というよりも政治学的である。労働者にとって、政治権力を掌握することはやさしいことではないが、一旦掌握した権力を維持することはより一層むずかしいことである。今日、社会主義や共産主義の権力に関する概念は(理論上でなければ事実上)国家もしくは特定官庁における行政権力に集中する傾向がある。しかし『原理』によれば、共産主義経済は革命の延長であり、百千年の歳月の後に実現するかも知れない望ましい国家などではない。すでに原理の次元で、ある党もしくは組織ではなく、労働者階級とその直接的な組織、労働者評議会によって評定がなされることが

規定されていなければならぬ。共產主義の実現は、党の事業ではなく、評議会を通して考え行動する全労働者階級の事業である。

生産と社会的富

革命における極めて大きな問題のひとつは、生産者と社会的富の新たな関係、(資本主義社会にあつては)賃金制度という形で表現される関係にかわるものをうちたてることである。賃金制度は労働力の価値(賃金)と労働それ自体(その生産物)との敵対的対立の上に成立している。仮に労働者が五〇時間の社会的労働をしても、彼に支払われる賃金はたった一〇時間の労働に匹敵する分ではないのである。労働者は、みずからを解放するために社会的生産から出てくる彼への支払いを決定するのが労働力の価値ではなく、この分配は労働それ自体によって決められるということを明確にしておかなければならない。労働は消費と等価である。これこそ労働者が確立しなければならない原理である。実際の労働量と労働とを引き換えに労働者に支払われる賃金の差は剰余労働と呼ばれる。この剰余労働時間において生産された社会的富は剰余生産物であり、この剰余生産物にこめられた価値は剰余価値と呼ばれる。いかなる社会も、従つてまた共產主義社会も剰余生産物の形成に依存している。必要かつ有効な労働力としての他に、有形の商品を生産しない人々もいるからである。彼等の生活の条件は他の労働者によって生産される(保険事務、老人や病人の世話をする人々、行政を担当する人々、学生等)。しかしそれは剰余生産が形成され分配される資本主義の搾取の本質をなす様式である。

労働者は各自、各々の生活にみあつた賃金を受けとる。労働者

はみずからが何をしたかはよくわきまえており、五〇時間働いたという。がしかし、彼は彼の労働の何時間分が彼の賃金になるのかは知らない。剰余労働の量に気づかないのである。所有者階級は、この剰余生産物を公共のために使う一部分を別として、資本拡大のために再び資本の中へ帰し、また搾取者の生活のもとと、警察と軍隊を含む政府の費用にあてるといふ形で消費する。

剰余生産物には二つの特徴的な性格がある。そのひとつは労働者階級は未払い労働分の生産物に関してほぼ絶望的にか、あるいは絶対的にいかに処理するかを決定することができないことである。賃金を受領することですべてが一段落してしまうのである。社会的富の生産と分配に関しては、労働者はどうすることもできないのである。生産手段を所有する所有者階級は、剰余労働を含む労働過程の支配者であり、彼の利益のために必要であれば労働者を敲首し、彼等の警察に我々を殴打させ、戦争にあつては大砲の餌食として労働者を戦場に駆り出すのである。ブルジョア権力は、彼等が労働・剰余労働・剰余生産物を所有していることの中に安んじている。これこそ労働者階級をして、被抑圧階級として社会的に重要ならしめる所以である。

もっとも、ロシアにおいては私的資本制は廃止され、剰余生産物のすべては国家が所有し、支配し、新しい社会法や新しい工場によって社会に配分されるのであるからもはや労働者の搾取はないとよくいわれる。

しばらくこの説を受け入れ、支配階級である官僚が法外な給料によって私腹を肥やし、自分たちの子弟のために高等教育の場を確保し、相続法によって彼等の家族のためにつみあげられた富を

保障し、みずからの権力を維持しているという事実を度外視するとしても、また官僚が大眾を搾取しているということが事実に関連するという意見を認めても、まだロシアの官僚が剰余労働を含む労働過程の支配者であるという事実は残る。官僚は西側におけると同じように、労働の条件を州連邦を通して指令している。

仮に、官僚が搾取していないにしても、それはただ善意によるものであり、搾取することを拒否する意志によってであり、官僚の地位を利用して私利をむさぼらない高潔さによるものである。

この型の社会は、もはや社会的経済的必要を基本とするのではなく、統治者の「善意」「悪意」にもとづく社会なのである。労働者の社会的富に対する関係に関する限り労働者の状況は変らない。社会的富が官僚の気ままに決定・処理され、労働者はそれに関して一切何もできず、悪い統治者ももっと寛容で、もっと「良い」統治者になるのを望む他はない。

端的に言えば、賃金制度の廃止は、労働者の労働が生み出し労働者の利益となるべき社会的富の配分を受けるための必要かつ充分な条件ではない。そこでこの配分量を増加することはできるが、真のいかなる性質の賃金搾取の廃止ともこれは全く違ったことなのである。この真の賃金搾取の廃止がなされないかぎり、革命はやがて墮落するだろう。「裏切られた革命」はやがて全体主義的資本主義国家へと導かれていくだろう。

さらにもう一つの結論が『原理』の中で導き出されている。資本主義の搾取を根本から廃止することを願う革命的労働者グループは、政治的に勝ち取られた権力を更に確立していく方法を解明しなければならぬ点である。何にもまして大切なことは、生産

手段の私有の終焉を要求する時代は過ぎ去ってしまったということである。また賃金制度の廃止を要求するだけでも充分ではない。もし賃金制度を廃止した後どのようにして社会を運営していくかを知らなければ、この賃金制度の廃止それ自体にはいかなる意味もないのである。この問題を解決できないグループは、新しい社会建設に関して発言権をもつことはできないだろう。

労働の評価

「異産主義の生産と分配の原理」は、次のような考え方から出発している。すなわち、労働によって生産されるすべての商品はすべて等しい質的価値を有する。というのは、それ等はすべて人間労働の一部分をあらわすものであるからである。商品があらわしている労働量のちがいのみが、各商品のちがいを生み出すものである。各労働者が個別に労働にうちこむ時間の尺度が「労働時間」である。ある対象があらわしている量や時間の測定にあてられる測定基準は「平均的社會労働時間」でなければならぬ。

これこそその社會が所有する富の集計のための測定基準であり、様々な企業の間を関係を成立させ、つまるところは一労働者当りの社会的富の分配計算の規準となるものである。ここに立脚して『原理』は更にいろいろなる理論の——また実践の、分析と批判を行い、様々な政治的潮流、一般的にはマルクス主義、アナキズム、社会主義の分析と批判を行っている。マルクスとエンゲルスが『資本論』や『ゴータ綱領批判』『反デュリング論』に書き記したことは、『原理』の適切簡明で確かな解説なのである。もちろん『原理』は共產主義のもとでの計算単位の研究のみならず、社

会的生産物の生産と分配、公共事業における新しい社会簿記の法の検討、生産の増加と労働者の生産管理等への適用、株式取引引きがなくなり農民は自分たちの収獲を労働時間で計算し農業協同組合を介して農業生産を管理することによって農業に共産主義を適用すること等の分析を含んでいる。このように、『原理』はプロレタリアートの権力奪取に關して、生産手段は機能的組織の手中にあるべきことを明らかにしている。その生産手段がプロレタリアートの手中に確保されるか否かの命運は、闘争の中で生れる労働者の共産主義的意識にかかっている。

以上のことから、プロレタリア革命は生産と分配に労働時間による計算を導入することによってのみ可能となる生産と生産者の間の關係を確定する。それはプロレタリアートが定式化できる最高の要求であり、同時にそれはプロレタリアートの主張の最低限のものである。プロレタリアートは工場段階で自治決定と自治運営が保障される限りにおいて企業を維持できる。労働時間による計算があまり適用されねばならない。

これが二十世紀前半のドイツ・プロレタリアートの運動によって世界に向けて発せられた最後のメッセージである。

補稿

本論文の出版については序文で述べたが、ドイツ革命前後の評議会運動に関する他の研究について付け加えておこう。

特にあげればイカルス(エルンスト・シュナイター・一革命海軍兵士)著『ウィルヘルム・ハーフェンの反乱』(ロンドン・フリーダム社刊)がある。フランス語では、本文に引用されたブル

ードン主義者の手になるものがある。アントン・パンネコックの著作目録は『労働者革命』の一九六二年に発表されている。英語版では、パウル・マティック著『オットー・リューレの生涯』があり、ドイツ語による研究としてはセバスチャン・フランクによるリューレの思想に関する研究がある。独立労働党はパンネコックの「労働者支配」に関する論文のパンフレットを出版している。

補稿 1

二十世紀のこのドイツにおける評議会共産主義運動はいくほくかの国際的影響力をもっていた。ことにドイツ共産主義労働者党(KAPD)の「極左」思想は世界にひろまった(彼らは最初第四インターナショナルを志向したが、これは後にモスクワと分裂したトロツキー主義者に引きつがれた)。ロシアでは労働者反対派(ジュリアピンコフ、コロンタイ夫人等)が、ドイツ共産主義労働者党と連絡を保っていたが、彼らも最後にはボルシェヴィキに合流した。バルカン半島にも同調的なグループがいた(ギリシヤ、ルーマニア、ユーゴスラヴィア等)において、彼らの一人はレーニン主義者によって警察に売りわたされた)。ことにブルガリアでは強い直接行動・テロリズムの傾向がレーニン主義や議会主義と対立しており、一九二三年に橋梁爆破を伴った叛乱が起り、一九二五年にはソフィア中央教会の爆破があった。ベルギーとくにオランダには、はじめゴルターを中心にして後には国際派共産主義者(GIKIH)のなかにこのグループがいた。活動的な最後の評議会共産主義のグループはオランダにあったのである。その他チェコスロヴァキア、デンマーク、フランスではアンドレ・ブ

ルドム（後にアナキズムの方へいった）を中心にして、アメリカではパウル・マティックを中心にして散的にこのグループがあり、『国際評議会通信』『生きていくマルクス主義』『新しいエッセイ』等を出版している。オーストラリアでは、『南部労働者評議会の声』がアントン・パンネコックの基礎研究を発表している。

イギリスでは、はじめシルヴィア・パンクルスと『労働者無敵艦』を含む活発な運動があった。後に共産主義者代表議士としてトリー党のベットとしての『可愛い人』となったウィリアム・ガラチャーは若気から彼らに加担した（後でレーニンに非難されたが）。評議会共産主義の首尾一貫した主張者はガイ・アルドレッドであり、彼の影響下にあった運動はグラスゴウの他グループよりも長い間健在であった。彼は反議会主義者として選挙に立候補したことによって運動を分裂させたが、選挙ではわずかな票しか集められなかった。反議会主義運動はその後何年か続けられたが、そのうちの多くのメンバーは一九三六年にアナキズムへ向った。しかし残った数人のメンバーはなお運動をつづけた。ことにウィリアム・マドールは『団結』を発行し、後には評議会共産主義から『開かれた広場』の社会主義へ進んだ。スコットランドの（そしてスコットランドからやって来た）支持者たちは労働組合に入らなかつた。彼らは労働党に入ると同じ位に労働組合へ入ることを嘲笑した。有利な条件にもかかわらず、この傾向は彼らを衰退へと導く原因となった。ジョン・オルディは一九四五年にスバルタクスをロンドンにおいて再生しようとした。

いま目の前にあるこの小冊子は、評議会共産主義の理論が偉大な理論家によって書かれたものではなく、ドイツ労働者の闘争のなかで成長してきたものであることを明白に物語っている。後になって数人の中産階級の理論家（パンネコック、ゴルター等）が体系的理論として定式化した。だがそれはドイツ革命によって書かれたものなのである。ブルジョア歴史学者は自己の存在を中産階級の歴史学者やお気に入りの理論家に書かせたがる傾向がある。そして彼らはいかにも大発見でもしたかのように、労働者は彼らの援助なくしては理論化することができない、とつけ加えるのである。

これらの理論が、一九六七〜七八年にドイツとフランスの学生によって取り上げられた時、ブルジョア理論家たちは多くの理論家について語ったが、一九一八年〜二一年のドイツ労働者階級の経験を忘れていた。『新しい』学生の思想傾向と評議会主義の路線の同一性は、この小冊子と次のエンティデュス委員会（国際主義派、占拠を維持するための評議会一九六八年三月三十日発表）のピラを比較してみればわかる。

学生は反乱を開始し、パリを隔らせ、たちまちのうちに工場は占拠された。引用するなら……

「我々がフランスでしたことは、世界中の支配者階級、モスクワと北京の官僚主義者をワシントンや東京の大富豪と同じ位に脅かすことであった。我々はパリをゆるがした。そしていま世界中の労働者階級は国家や反革命の城塞を襲撃せんとしている。国全体の工場や公共の建物を占拠することは単に経済の動

きを停止させるにとどまらず、新しい社会の眺望を垣間見せるものである。国民のほとんどが全く新しい生活をいかに生きるかを教えられた。これは生活に革命的な運動を引き起していた。その運動は革命をひき起こすためにすでに行つたことを生活のなかで現実化することをまさに必要とするものであった。」

「何が資本主義を延命させているのか。体制はただ軍隊の威かくでもってのみかろうじて崩壊寸前にあるみずからを支えている（選挙の問題は運動が敗北した後から起つてきた）。左翼に關して言えば、旧世界を守るためにあまりにも軍隊をあてにしすぎていた。共産党と呼ばれる、スターリン主義官僚の党ははじめから革命運動に反対して闘つてきた。それは単にドゴール体制の片方の勢力であることを願つたにすぎなかつた。その党が考へる型の政府は（もし選挙で勝利しても）ケレンスキー政権であろう。∴事実彼らのうちの数人は、資本主義的な交渉の手段において労働組合はより多くを得ることを期待できると主張した。しかし労働者は占拠した場所の管理を確保することによつてすべてを得ることができ。」

「現在の運動は、単なる賃上げや労働条件改善等の条件闘争ではない。これは革命であり、我々が一世紀以上もの間まちのぞんでいたものである。∴現時点にあつては、労働者の唯一の前途は、經濟を直接みずからの手中に握り、政党や労働組合に對して自分たちの自治を確立し、下部からくみ上げる形で、全員を代表する委員会によつて社会生活の再建を推し進めることである。労働者はみずからを防衛し、經濟支配を貫徹するため、地域的、全国的に連合しなければならない。このような方法

で眞の権力は労働者評議会に移ってくる。もっともそれは、革命かきまなければ無か、と云うことなので失敗すれば労働者が得るものは何も無いであろう。」

「何が労働者評議会を規定するか。すべての外部権力の解散、直接的全体の民主主義、実践的な単位と即座の決定、あらゆる場合に罷免可能な代表、職階制と職業的指導者の廃止、すべての生活条件の管理、全社会生活における大衆の永続的創造的な参加等、労働者支配はそれ以下のものであつてはならない。あらゆる現在の形を詭弁を使って労働者評議会を騙し、いかなるものであれ、これ以下の範囲で労働者評議会を主張するベテニ師に氣をつけよ。ここに述べた範囲の規程がなければ官僚主義、職階的指導、みせかけだけの知識階級としての特權等を維持し、自分たちの特權を将来に保証しようとするなう。しかしもし労働者評議会が經濟全体を支配するならば、それは革命的労働者の手中に留まるであろう。プロレタリア革命は自然発生的に一九〇五年にペテルブルグで、一九二〇年にチューリングで、一九三六年にカタロニアで、一九五六年にブタペストで形成された。どのときにも、古い社会、新たな搾取階級の形成は労働者評議会の敗北に乗じて起つた。革命組織は、あらゆる形の反革命に對して闘わねばならない。すべての革命組織は反革命の目ざすところに反對して起つたものであるから、反革命に對する対決は労働者評議会によつてなされる。」

補稿 3

ドイツ労働者階級のなかに深くしみ込み、一九一八年のドイツ革

命の経験によって変質したマルクス主義の思想に、まったく違った道を通って育ってきたアナキズムが似ているのは奇妙なことである。最も進んだ評議会共産主義と革命的アナキズムの間に言葉の違いを除いて、ほとんど大きな差はない（ドイツでは多くの人はドイツ自由労働者同盟（F.A.U.D.）と工場組織に所属していた）。評議会共産主義者はアナキズムに近づいているときでもアナキズムに対するマルクス主義の側からの批判意見を持ち続けていた（フランス労働者階級のアナルコ・サンジカリズムから直接やってきた産業活動を援助するための個人テロを受け入れるようになった時でさえ、マルクス主義の立場から批判した）。だが、何が批判の主軸であったか、非常によく言われたことは、単にその時々の時流にのったものにすぎない。党建設を拒否することはいくつかの問題を引き起すが、党建設がなお深刻な問題を引き起すことは否定できない。このようにアナキズムの批判者は革命的アナキズムと、著作権侵害法によって防ぐことのできない革命的でもなくいくせにアナキズムの名を僭称することを好む者とのちがいが解らない人——彼はそのような人間が単にアナキズムの内部ですぐれた者でないのみならず、たまたま当時みずからをアナキストと称して（故ハーバート・リードのように）、単に有名（ちがった意味で）であったにすぎない。仮に党でなく、あるきまった運動にその人が入っているようがいまいが、批判は常にアナキズムに向けられがちであった。一般的な規準という本当のアナキストでない者が、アナキズムを称し、アナキストと自称する権利があると主張しているからである。

これはひとりアナキズムが答えなければならぬ。問題ではない。今日の主要

な課題は労働者評議会の形成である。突然、左は自由党から右は「のろろ操従」の改良主義者（残念なことにこれは雑誌『アナキー』に果食している）の誰もが、そして特にトロツキー主義者が労働者評議会を望んでいる。ときには彼らは正直で、次の書き足しをつけ加えている。いわく「国有化」を「民主支配のもとに」等々の誰もがその名を専売特許にすることもできなければ、労働者評議会を社会学者もあげてそれを望んでいるという理由で馬鹿げていると考えることもできない。労働者は皆評議会のために闘わなければならぬ。生活のすみずみまで、また経済の全域にわたって（日和見主義者がそうするように）、何一つ省略することのないように闘わなければならぬ。でなければ、すべてが無意味となるからである。また他のいかなる形の権力を許しても労働者が権力をにぎることはできない。しかし、労働者参加、国家管理経済のうちにおける労働者の经济管理、その他トロツキー主義者の思想も労働者への権力を意味しない。

△訳者後記▽

今日、マルクス主義の潮流が様々なに分化し互いにその正当性を主張している。ソビエト共産党は、利潤制導入等大はばな修正をしながらも、尚マルクス主義の旗はおろしていない。議会主義マルクス主義、反議会主義マルクス主義、民族派マルクス主義、国際派マルクス主義等々様々にわかれてはいるが、教条的な意味においてはなく、現在マルクス主義が置かれている状況を正確にとらえ、真に搾取と隷属の壁をつきとる壁をつかむために共産主義（八三頁につづく）

ことなしにそれは彼らの表わす思想が集会的反応を結実させ、労働者間の自然発生的見解の討論と交換を結実させていて、決して閉じられたつぼの中の個人的な知的遊戯的産物とはなっていないからである。

西側の人びとの中にはこれらの意見はあまりにも基本的であり、また非政治的であると思う者もいるかもしれない。しかし、古いロシアの労働者階級が革命と内戦とともに消え去り、それにかわって殆んど全土にわたって農民を出身とする、あるいはそれに類似した新しい労働者階級が育成されたことを想起すれば首肯できよう。彼らは古い闘いの経験のある労働者階級から完全に庶断され、恐怖の企業地獄に隷属を余儀なくされ、歴史に先例をみない韜晦に隷従させられていたのである。今日でも依然として彼ら自身の組織、彼ら自身の手になる新聞を有する可能性はきわめて小さく、ソ連プロレタリアートは実際的に言ってゼロから全てやりなおさなくてはならないことを自ら知るのである。

(P・イワノフ)

註釈 このソ連労働者の声は昨年暮ハポリチック・エブドV誌に掲載されたものを訳出したものである。P・イワノフ氏は現在フランスに在住しているが、これを執筆するにあたっては純粋にソ連国内の具体的な資料によっている。

X X X

(七三頁より) の歴史をその起源にまでさかのぼって深く検討する必要がある。

歴史の中でその時代に虚勢であった者の記録は多く残りがちであるが、ことに共產主義の歴史の中では長いスターリン主義の支配の中で、自然にかあるいは人為的に消されて行った資料も少ないと思われる。消されて行った資料の中に意外と真実を語るものが多いことは諸質の知るところである。我々はできるだけこのような資料をさがし出し邦訳してゆきたいと思う。

性とアナキズム

小川正夫評論集

六〇〇円(送料共)

名古屋市昭和区小坂町二の一六

小川正夫遺稿集刊行会

山鹿泰治・人とその生涯

エスペラントとアナキズム

向井 孝著 六〇〇円(送料共)

東京都板橋区赤塚二の三五の九

白樺ハウス一〇号 青蛾房

(いずれも本誌編集部でも取り扱っています)